

# 平和・女性の権利 発信最期まで



日本国憲法ができていきさつを話すベアテ・シロタ・ゴードンさん。2008年4月、札幌市

## 憲法起草 故ゴードンさん

連合軍司令部（GHQ）の一員として日本国憲法の草案づくりに携わり、昨年末に89歳で亡くなった米国人ベアテ・シロタ・ゴードンさんは、亡くなる直前、残された力を振り絞って憲法についての取材に対応し、平和や女性の権利の大切さを語っていた。



母の思い出を語るニコルさん。渡辺志帆撮影

快諾していたが、それだけの体力が残っていなかった。それでもなお、電話ならば、と応じることにした。

憲法の平和条項や女性の権利に関する質問を事前に受け取る

と、「私が持ちこたえられるうちに」と、答えを口述筆記するようニコルさんに頼んだ。「平和条項は世界にとってのモデルであり、逆戻りすれば悲劇だ」

「以前の境遇に女性を戻したい、という人がいるとは考えられない」

ニコルさんがその晩、できあがった回答を手渡すと、翌朝にはペンで推敲が加えられていた。「母にそんな力が残っていたら、直接会って取材を受けると

とは思わず、とても驚いた」。ベッドから起き上がるのも大変だったが、電話を受ける時にはきちんとした身なりに着替えようとした。

当日、電話の約束は午後だった。ゴードンさんは残された時間が長くないことをさどっていたのか、朝のうちにニコルさんに「今かけた方がいい」と頼み、朝日新聞ニューヨーク支局につないでもらった。憲法の起草過程を「エキサイティングだった」と振り返った。だが、もはや長時間の会話は難しくなっていた。

記者がメールで追加質問を送ると、答えを口述し、ニコルさん

に書き取らせた。衆院選で女性議員が減ったことを残念がり、日本の若い女性に「もっと積極的になってほしい」と望んだ。日本への強い思いが感じられる返事になった。最後の送信を見届けた後は、話すことも難しくなり、家族に見守られながら、1週間後に息を引き取った。

「母は最後の力を振り絞り、強い意志でやり遂げた。満足して亡くなったと思う」。ニコルさんはそう振り返った。訃報には世界中から多くの反応が寄せられ、各地で追悼集会が開かれた。「母が亡くなる間際まで努力して送ったメッセージが世界に伝わり、人々を奮立たせたんだと感じる」

## 長女「力振り絞ってやり遂げた」

30日午後、都内で開かれる偲ぶ会への出席などのため来日した長女ニコルさん（58）が、母親の最期の日々を明らかにした。ゴードンさんは2012年12月30日、膵臓がんのためニューヨークの自宅で亡くなった。10日朝の朝日新聞の電話インタビューが最後の発信だった。

ニコルさんによると、ゴードンさんの体調は1年ほど前から思わしくなかったが、12月に入って急激に悪化した。11月末には、直接会って取材を受けると

記者がメールで追加質問を送ると、答えを口述し、ニコルさん

に書き取らせた。衆院選で女性議員が減ったことを残念がり、日本の若い女性に「もっと積極的になってほしい」と望んだ。日本への強い思いが感じられる返事になった。最後の送信を見届けた後は、話すことも難しくなり、家族に見守られながら、1週間後に息を引き取った。